

帝 塚 山 大 学

国 語 試験問題

試験時間 50 分

- 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
問題は全部で12ページです。試験開始とともにまずページ数を確認してください。
- 解答は、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルで正しくマークしてください。
- 解答は、解答用紙の対応する解答番号欄にマークしてください。
- 受験番号は受験番号欄に記入し、受験番号欄の下欄にマークしてください。
- 解答用紙の科目名記入欄には国語と記入し、さらに国語の欄にマークしてください。
- 解答を訂正する場合には、消しゴムで完全に消し、消しきずが残らないようにしてください。
- 解答用紙は汚したり、折り曲げたりしないでください。
- 終了後退出するとき、問題冊子は持ち帰ってください。

マーク解答用紙記入例

◇受験番号記入例

〔受験番号 10001B の場合〕

受 験 番 号 欄					
万位	千位	百位	十位	一位	英字
1	0	0	0	1	B

受験番号 (マーク)	万位	●	2	3	4	5	6	7	8	9	0			
	千位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	●			
	百位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	●			
	十位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	●			
	一位	●	2	3	4	5	6	7	8	9	0			
	英 字	A	●	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
		N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z

◇解答記入例

〔解答が③の場合〕

良い例

解 答 番 号	解 答 欄
1	① ② ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

記入枠のマーク内を塗りつぶす

悪い例

解 答 番 号	解 答 欄
1	① ② ③ ④ ●
2	① ② ③ ④
3	● ② ③ ④

- 左のようなマークが不完全なもの

- 塗りつぶしがはみ出ている

- ×印をつけても消したことになりません

このような記入をしてはいけません。

◇科目名記入例

科目名記入欄	国語	英語	日本史	世界史	数学ア	数学イ
国 語	●	○	○	○	○	○
					理科①	理科②
					○	○

I

次の課題文（日本語）を読んで、後の問いに答えよ。

解答番号

1

、

29

著作権の都合上、省略。

著作権の都合上、省略。

著作権の都合上、省略。

著作権の都合上、省略。

(橋本治『人はなぜ「美しい」がわかるのか』による)

〔注1〕柳宗悦やなぎむねたけの「民芸運動」……

日本の思想家の柳宗悦（一八八九—一九六一）が民衆の暮らしのなかから生まれた美の世界を人々に紹介しようと、一九二五年（大正一四年）に「民芸」という言葉を作って開始した運動。

〔注2〕以前にも言いましたように……

著作権の都合上、省略。

〈設問〉

問1 傍線部(1)～(10)のカタカナの部分と同一の漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

(1)	カイシヤク	① シヤク位を授かる	② シヤク然としない	1
		③ 情状シヤク量する	④ 既成のシヤク度による	
		⑤ 傘を拝シヤクする		
(2)	シヨセン	① セン明に覚えている	② 社会の変センをたどる	2
		③ 独立をセン言する	④ セン在能力を開発する	
		⑤ 事実をセン索する		
(3)	ジツサイ	① サイ幹のある人物	② サイ限のない要求	3
		③ 会長のサイ配に従う	④ 負サイをかかえる	
		⑤ 提案をサイ択する		
(4)	カイキ	① 人生の分キ点に立つ	② 実力を発キする	4
		③ 当然のキ結	④ キ特な行い	
		⑤ 権利を放キする		
(5)	サツチ	① 工場を視サツする	② 人事をサツ新する	5
		③ 奈良の名サツを巡る	④ 摩サツを生じる	
		⑤ サツ影を完了する		
(6)	シヨウメツ	① 雲散霧シヨウ	② 針シヨウ棒大	6
		③ 緩シヨウ地帯	④ 時期シヨウ早	
		⑤ シヨウ止千万		

(7) ゼビ

- ① 可ヒを明らかにする
② 門ピを開く
③ ヒ判にさらされる
④ 己のヒ力を知る
⑤ 芸をヒ露する

(8) ナイホウ

- ① ホウ建的な組織
② 絵馬をホウ納する
③ ホウ和状態になる
④ 意見をホウ括する
⑤ 病人を介ホウする

(9) フジョウ

- ① 陳ブな言い方
② 完ブ無きまでに負ける
③ 家族をフ養する
④ フ遍的な真理
⑤ 会社のフ沈にかかわる

(10) コシヨウ

- ① コ軍奮闘
② 温コ知新
③ 栄コ盛衰
④ 脚下照コ
⑤ コ大妄想

問 2

二重傍線部(ア)の語句の正しい読みを〔A〕群の①～⑤のうちから、また、その意味として最も適当なものを〔B〕群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

〔A〕

(ア) 氾濫

- ① こんらん
② ほんらん
③ はんらん
④ はんかん
⑤ ほんかん

〔B〕

(ア) 氾濫

- ① 次々と生み出されてありあまること
② どんどん流布して止められなくなる
③ やたらに多く出回ってあふれかえること
④ 勢いがわきあがって猛威をふるうこと
⑤ 複雑に入りまじって整理がつかなくなる

問 3

空欄(ア)～(オ)に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

ア

- ① だからこそ
② なぜなら
③ いったい
④ あるいは
⑤ 少なくとも

イ

- ① そのため
② あたかも
③ 実は
④ しかし
⑤ もしくは

14

13

12

11

10

9

8

7

ウ	① ところが	② そのくせ	③ しかも	15
	④ だから	⑤ けっきょく		
エ	① むしろ	② 既に	③ しかしながら	16
	④ まして	⑤ 逆に		
オ	① 一方で	② つまり	③ よもや	17
	④ ときに	⑤ それでも		

問4 空欄 a (e に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

a	① 複雑	② 慎重	③ 浅薄	18
	④ 拙劣	⑤ 頑迷		
b	① 知識	② 情熱	③ 能力	19
	④ 根気	⑤ 論理		
c	① 執拗 しつよう	② 躍起 しんち	③ 繊細	20
	④ 鈍感	⑤ 辛辣		
d	① ジャンル	② 希望	③ パラドックス	21
	④ 枠組み	⑤ ハードル		
e	① 目的	② 必須	③ 起点	22
	④ 選択肢	⑤ 不条理		

問5 傍線部Aに「なんらかの下心を感じます」とあるが、筆者が考える「下心」とはどのようなものか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。 23

① 「容貌が美しくない」を前提とする人について、性格という内面の美しさを、本来は容貌の美しさを表す「美人」という言葉を使って表現することによって、美しい人だという称号を獲得しよう、とする下心。

② 「容貌が美しくない」を前提とする人について、容貌のみを評価して美人ではないとする通念に反抗し、存在の美しさにこそ「美人」の称号はふさわしいという新しい思想を認めさせよう、とする下心。

③ 「容貌が美しくない」を前提とする人について、「存在は美しい」という意味で「美人」の称号を使うことによって、「存在は美しいという質の容貌の美しさを狙う、存在の醜さ」を隠そう、とする下心。

④ 「容貌が美しくない」を前提とする人について、容貌の美しさは一つの価値観で判断できるものではなく、多様な美しさが見出せるのだと考えることによって、「容貌の美しい人」という称号を獲得しよう、とする下心。

⑤ 「容貌が美しくない」を前提とする人について、「存在の美しさ」がよく分からないものであることを利用して、性格に「その人なりの美しさ」がある人は「美人」だという社会的に公平な評価を獲得しよう、とする下心。

問 6

傍線部 B に「美しい」が長い間「制度的」な存在だった」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

24

① 社会制度において、人間が「美しい」を発見してから、「醜い」という判断が生まれ、「醜い」と言われることを人々が恐れるという状態が長く続いてきたのに対して、自分の容貌の美は自分自身が判断すればよいから恐れなくてよいのだと考えるようになったのは最近のことである、ということ。

② 社会制度において、「民芸運動」に代表されるような、「美しいのは特別なことではない」という思想が二十世紀に生み出されたのに対して、生活が豊かになってちょっとした贅沢^{ぜいたく}が可能になって、人々が「美貌」を磨くことも自由にできる風潮は現代に至るまで長く続いている、ということ。

③ 社会制度において、容貌が美しいという評価を得ることが、貴族的な社会特権の獲得につながり、特権があれば生きやすくなるという状態が長く続いてきたのに対して、美しいのは特別なことではなく、存在に美醜はないという思想が出てきたのは二十世紀になってからである、ということ。

④ 社会制度において、「美人コンテスト」という、他よりも「美しい」という差異を言い立てて、自分を「王侯貴族」の類と同一視するような状態が長く続いてきたのに対して、比較することはナンセンスだという思想が認められるようになったのは最近のことである、ということ。

⑤ 社会制度において、「美しい」や「美貌」を特権として王侯貴族など一部の階級が独占してきた歴史が長く続いてきたのに対して、「特権があれば生きやすくなる」という人間の「都合」が一般の人々の間でも主張されるようになったのは二十世紀になってからである、ということ。

問 7

傍線部 C に「作る」が簡単になってしまふとろくなことはありません」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

25

① 「作る」が成功して「完成」に至るまでには、「失敗＝出来ない」という事態が存在するのが本来だが、失敗を回避して簡単に「作る」ことが可能になると、人間が性^{さが}として

持っている「作る」が成功して「出来た！」という達成感を得られる機会がなくなってしまう、ということ。

② 本来「作る」という簡単な言葉には、失敗や挫折を繰り返して成長していくという複雑なプロセスが隠されているのだが、機械の開発によって簡単に「作る」ことが可能になると、人間が技術を身につけることができなくなって、機械に取って代わられてしまう、ということ。

③ 「作る」には、時間をかけて失敗を繰り返しながら試行錯誤をしていくという複雑なプロセスがあるのが本来だが、そうしたプロセスを省いて簡単に「作る」ことが可能になると、「自分の思い込み」のままに「美しくなることに失敗したもの」を生み出してしまふ、ということ。

④ 本来「作る」が成功して「完成」に至るまでには、時間や手間をかけることが必要とされるのだが、人間が「時間がかかる」を欠点として克服し、簡単に「作る」ことが可能になると、産業の効率化が進められるようになり、職人の手で作られる本物が失われてしまふ、ということ。

⑤ 人間にとって「作る」は自然の中で試行錯誤や失敗を繰り返すという複雑なプロセスを経るのが本来だが、時代とともに科学の進歩によって簡単に「作る」ことが可能になると、「自分の都合」を第一として、さらなる進歩を求めて自然環境を破壊してしまふ、ということ。

問 8

傍線部 D に「昔に作られたものには「いいもの」が多いのです」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

26

① 昔は人が完成させてフォームを持ったものについて、「よし、悪し」という新しい達成基準が生まれ、一旦完成に至った技術であっても、新しい時代の価値観に合わなければ捨てられていたので、時代を超えて伝わって行くものには優れたものが多かった、ということ。

② 昔はものを「作る」ためには無数の失敗を克服しなくてはならなかったので、「出来上がったもの」には「出来上がるまでのプロセス」が刻まれていて、人々が技術をよりよいものへ進歩させるために、いかに苦労してきたかという歴史を見る者に感じさせるものが多くなった、ということ。

③ 昔は「いいものは簡単に作れない」と言われていて、ものを作る人間は「模索とためらいと失敗」の中からしか技術を生み出すことができなかったもので、他者からの評価を克服して自らの「いいものを作る」という信念を貫いて作られるものが多くなった、ということ。

④ 昔は「作る」ための技術を身につけるには時間がかかり、それを適用して完成させる

ためにはさらにためらいと挫折を経て模索することが必要だったので、そのプロセスにおいて「よりよい」という領域を目指して磨き上げられて完成に至るものが多くなった、ということ。

⑤ 昔は旧石器時代から新石器時代に移行するまで何千年もかかったように、ものを「作る」技術を獲得することは困難で無数の失敗を繰り返しながら長い時間をかけることが必要だったので、その中で完成に至ったものは貴重とされるものが多くなった、ということ。

問9

傍線部Eに「葛藤は、完成のための研磨材」かもしれませんが、これはどういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① ものを作るとき、時間がかかるという欠点の克服が不可避だが、産業の機械化によって克服しようとすると、好きなように作りたいという自分の都合や思い込みと機械の合理化との葛藤の中を進むことになるため、充実感が削り取られて完成に至ることはできないかもしれない、ということ。

② ものを作るとき、時間をかけても、「作ることに失敗したもの」は「もの」にならないので、絶対に成功させるという思い込みや自分の都合にとらわれる人は失敗のリスクとの葛藤の中を進むことになるため、心が削られて挫折してしまい、完成に至ることはできないかもしれない、ということ。

③ ものを作るとき、一人で「簡単に作れる」という質の技術がない場合は、時間をかけて人々の協力を得ながら進めなくてはならず、他者との葛藤の中を進むことになるため、自分の都合を取り捨てて他者を思いやれるような人間でないと完成に至ることはできないかもしれない、ということ。

④ ものを作るとき、「失敗への枝道」を回避しながら、あえて遠い回り道をして「出来た」のゴールを目指さなくてはならず、時間をかけることと同義の葛藤の中を進むことになるため、忍耐力を錬磨する試練を乗り越えないと完成に至ることはできないかもしれない、ということ。

⑤ ものを作るとき、時間をかけて、ちゃんと作ろうとすると、どうしても失敗する可能性が出てきてためらったり、挫折して試行錯誤を繰り返したりといった葛藤の中を進むことになるため、自分の思い込みや都合を取り去っていかないと完成に至ることはできないかもしれない、ということ。

問10

傍線部Fに「機械に「作る」をまかせてしまった人間は、そのことがよく分からなくなってしまう」とあるが、これはどういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 人はものを作ろうとして、「観念」を現実化する前の段階で失敗の可能性を想定し、時間をかけて検討することによって「ためらい」を克服して「作る」の道を進んできたのに、「産業の機械化」は経済優先の社会を確立し、その枠組みの中で「ためらい」などの人間的な感情は軽視されるようになってしまった、ということ。

② 人はものを作ろうとして、ためらいながら模索し、挫折と失敗を繰り返して試行錯誤するというプロセスに時間をかける中で、自分の思い込みを修正して、「完成＝美しい」の待つゴールに近づいていたのに、技術を機械に置き換えたことで時間が省かれ、自分の都合を削り落とす必要性に気づけなくなってしまった、ということ。

③ 人はものを作ろうとして、ためらい続ける傾向があり、「試作」の後の段階になっても残る「ためらい」を克服するプロセスを通して、完成したものに固有のフォルムを持たせることを可能としていたのに、機械化によってそのプロセスが奪われたため、機械的なフォルムのものが大量生産されるようになってしまった、ということ。

④ 人はものを作ろうとして、ためらいながら、その「ためらい」を克服しつつ、「作る」の道を進む中で、迅速かつ合理的に完成させるという自分の都合をあきらめていたのに、人間の技術を機械に移し換えられたことで、楽をして早く作るという自分勝手な願望を實現できるようになってしまった、ということ。

⑤ 人はものを作ろうとして、「美しいはず」「合理的であるはず」「機能的であるはず」という快適な環境を求めながら、自然への影響を考えるなど、「ためらい」を持って葛藤することがブレーキとして機能していたのに、「産業の機械化」によって葛藤を持たずに人間本位の開発が進められるようになってしまった、ということ。

問11

本文の内容に合うものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

29

① 豊かな自然に囲まれた日本では、多様な美しさが見出されてきた伝統があり、人の存在の美しさは容貌とは直接に関係がなく、存在そのものは美しいという前提に立たなければならぬという思想が古くから浸透してきた。

② 「石器」というのは、人間が作り出した最も古い道具の一つであり、石と石とを叩き合わせれば作ることができる原始的なものであるが、現代人の技術をもつてしてもまったく同じものを再現するのは困難であることを、筆者は経験から理解した。

③ 人間はものを作るための「技術」を学習して獲得することができるので、その時代において生み出された新しい技術を相互に共有し、さらに衆知を結集して「よりよいものを作る」という未知の領域に届くように技術を適用することが可能である。

④ 昔には「簡単に作れる」という質の技術がなかったもので、人間の労働力と時間をかける必要があり、さまざまなものを作り出すことが仕事として成立していたが、産業革命以降の「産業の機械化」は人間から仕事を奪うことになった。

⑤ 機械化による大量生産は、産業や経済の発展といった立場からは有意義だとする意見もあるだろうが、人間が観念を修正することなく形にすることを可能にしたという点では、人間のあり方、自然のあり方に対する間違いであると言える。